HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	仏教国としてのロシア帝国 : 二つのカルムィク人社会に関する考察［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	井上, 岳彦
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第11591号
Issue Date	2014-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57736
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Takehiko_Inoue_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）　　氏名：　井　上　岳　彦

学位論文題名
仏教国としてのロシア帝国：二つのカルムィク人社会に関する考察

本論文は、17 世紀から 20 世紀初めまでの長期にわたるカルムィク人の歴史を、仏教を軸に論述・考察するものである。サンクトペテルブルグ（ロシア国立歴史文書館および図書館・研究所の手稿部）、エリスタ（カルムィキア共和国国立文書館）、モスクワ（ロシア国立軍事史文書館、ロシア国立古記録文書館、ロシア帝国外交文書館）、ロストフ・ナ・ドヌー、アストラハン、スターヴロポリというロシア各地の文書館で渉猟した未公刊一次史料を中心に、ロシア語・カルムィク語の多数の史料を用いている。また、近年のロシア帝国論（特にムスリム地域に関するもの）や清朝期チベット仏教世界論、帝国医療論などを意識した立論をし、カルムィク史を広い文脈の中に位置づけようとしている。

序章（第 1 章）では、18 世紀のロシア帝国と仏教の出会いの歴史を簡略に述べたのち、近年のロシア帝国論における宗教政策研究（特にクルーズのイスラーム政策史研究とツィレンピロフのブリヤート仏教論）の主な論点をまとめ、さらにカルムィク仏教史の研究史を概観する。そして、1806 年以降の約 1 世紀、同じカルムィク人でもヴォルガとドンでは別個の僧伽が存在したことを強調して、カルムィク人仏教徒の二つの社会の考察から新しいロシア帝国像を示し、ロシア帝国と仏教徒の相互関係のダイナミズムを明らかにすることを、目的として提示する。

第 2 章「ノヨンの政治」は、ヴォルガ・カルムィク統治の仲介者としてのカルムィク人貴族について論じる。1771 年にカルムィク人の多くが東方のジューンガリアを目指して移住したのち、ヴォルガに残ったカルムィク遊牧民に対するロシアの統治政策はしばらくのあいだ一貫せず、正教に改宗したドンドゥコフ公を貴族のまとめ役とする構想も頓挫した。19 世紀に入るとテュメネフ公（トゥメン公）がこの地域におけるロシアの脆弱な統治制度を補完するようになり、宗教管理に関する助言や情報提供、農業の推進、ロシア軍カルムィク人連隊の指揮などさまざまな役割を担った。

第 3 章「痘瘡予防接種事業の僧侶と社会」では、ロシア政府が仏教とラマ職を公認しながらも、僧侶に定員を設けて徐々に減らし、僧侶を世俗社会から可能な限り引き離していった（隔離政策）という基本構図を示したうえで、例外的に僧侶が統治に関与した事例として、痘瘡予防接種事業について詳述する。19 世紀初め、ヴォルガ下流域アストラハン県の行政官のイニシアティヴとトゥメン公の協力のもと、高僧アルシ・ゲリュンが種痘技術を習得し、のちには他の僧侶たちも加わって、予防接種を普及させた。ただし時期によってはコレラがより優先的な課題になったことなどで種痘事業が停滞した。また行政官の中には僧侶への不信が根強く、僧侶を種痘事業から排除する動きもあったが、一般のカルムィク人がロシア語を知らずロシア人医療助手を信頼しない状況の中で、政府は葛藤し、結局僧侶にある程度頼らざるを得なかった。

第 4 章「ドン・カルムィク人：もうひとつのカルムィク人仏教徒社会」では、コサック軍に編入され帝国にとって有用な戦士として位置づけられ、次第に定住生活を送るようになったドン・カルムィク人の社会を論じる。ドン・コサック軍はカルムィク人貴族を排除したため、統治の仲介者としての僧侶の役割が、ヴォルガ下流域の場合よりも大きく期待された（例として教区学校の開校式で行われた仏教儀礼が挙げられる）。同時に寺院・僧侶数の削減も行われたが、ドン軍の軍人たちがカルムィク人の教育と僧侶の養成に関心を持つなど、積極的な関係構築が図られた。

第 5 章「仏教の道」は巡礼に注目し、まず 17 世紀にカルムィク人が内陸アジアからヴォルガ地域に移住した時期に話を遡らせて、移住を率いたホー・ウルリュクの息子ダイチンのラサ巡礼から説き起こす。以後、カルムィク人僧侶にとってチベットでの修行と仏具購入が重要となったが、

ジューンガルを中心としカルムィクを含むオイラト内の覇権争いが関係して、巡礼は露清間の外交問題となり、1715 年以降はロシア政府により制限・管理されるようになった。「外国宗教」であるチベット仏教の権威と臣民の接触は、ロシア帝国にとって潜在的な脅威だったのである。カルムィク・ハン国が解体された 1771 年から百年余りにわたって巡礼は途絶するが、カルムィク人（特にドン）の商業牧畜による経済力の高まりと、ロシア帝国の鉄道・汽船網の整備を背景に、1877 年以降、まずイフ・フレー（モンゴル）への巡礼が始まり、チベットを目指す動きも活発化した。これにブリヤート人高僧アグヴァン・ドルジエフの動きも重なり、カルムィク人と他地域の仏教徒の関係、およびロシア・チベット関係が深化した。

第 6 章「仏教徒のロシア皇帝像」は、カルムィク人仏教徒のロシア皇帝像を検証する。モンゴル系・テュルク系の諸民族はロシア皇帝のことをしばしば「白いツァーリ」と呼んだことが知られており、特にブリヤート人は皇帝を白ターラー菩薩の化身と見なしたと言われる。しかしカルムィク人の政治指導者や僧侶が残した史料を見ると、白いツァーリに当たる「白いハーン」という表現は、ピョートル大帝が正式に皇帝 imperator を名乗った 1721 年以降減っている。この表現は、1822 年の請願書で、かつてツァーリがカルムィク人の先祖伝来の法を認めたことをロシア政府に想起させる文脈で使われ、帝政末期にはロシア人の作った教科書の中で皇帝の神聖化のために使われた。またロシア皇帝を菩薩王とする観念は、ロシアが「北のシャンバラ」として仏教を復興させることを期待した高僧ダムボ・ウリヤノフの著作（1913 年）の中に現れる。

終章（第 7 章）は、以上の各章で述べたことを、ロシア帝国論とチベット仏教世界論の観点からまとめ直す。ロシア帝国による公認宗教の管理制度の下で、仏教僧侶たちは帝国支配の様式を内面化させたが、文殊菩薩の化身とされた清朝皇帝を擬する役割をロシア皇帝に期待する部分もあった。僧侶たちは、ロシア帝国を包摂した新しい「チベット仏教世界」を、ヴォルガ・カルムィク、ドン・カルムィク、ブリヤートそれぞれ別のやり方で描き出したのである。